

聾学校幼稚部における保護者支援の事例的考察

大 島 光 代 (愛知県立一宮聾学校)

都 築 繁 幸 (愛知教育大学障害児教育講座)

要約 聾学校における保護者支援の2事例の分析から母子関係が言語発達の基礎になっていること、また子どもを正しく理解しながら向き合う関係を構築するように支援する方向性が有効であることが示された。2事例は、人工内耳装用と補聴器装用の点は異なるが、最早期教育の開始が大幅に遅れ、子どもが集団活動になじめないことや言語発達に遅れが生じていること、聴覚活用の点など類似点が多かった。2名はいずれも、言語を使う必要性を感じず、身振りだけで意思を伝える期間が長かった。また音韻獲得が困難で、視覚優位の記憶が勝っている点で、聴覚口話法だけでは言語発達が難しいことが予想された。母子関係が改善されることで言語学習に意欲を持ち始めた。気持ちが安定し、前向きな姿勢になることで少しずつ言語力に伸びが見られるようになった。しかし、音韻の入りにくさは、それほど改善されてはいなかった。子どもの特性によって、言語発達が遅れている場合は、その子どもに適した指導法、教材を確立し、提示しなければならないことが示された。

キーワード：聾学校幼稚部 保護者支援 聴覚活用 人工内耳

I. はじめに

聾学校における保護者支援の実践事例を検討することにより、保護者支援の方向性を探りたいと考え、実践を行った。本稿では、その事例を報告する。

II. 事例1 (A男) について

(1) 幼児の様子

現在5歳10か月。聴力は裸耳で右110dBHL、左109dBHL。右耳は人口内耳装用により、40dB SPL前後である。

教育相談を開始したのは、3歳2か月からであり、開始時期としては遅い方である。

相談開始より半年後に保護者の希望により人工内耳装用のため手術を受ける。学校側としては、人工内耳装用に疑問を抱いていた。それは、(ア)聴力が本当に厳しいのか、(イ)A男は自分の世界に入っていることが多かったため、聴力検査を受ける姿勢が十分には育ちきっていない、(ウ)言語に対する意識や概念がまだ十分には発達していない、という点からであった。

① 3歳児学級での様子

音は聞こえている様子で自分の声で遊ぶかのように常に声を出していることが多かった。集団での活動には、参加したくないという意思表示をして、参加しないことがしばしばあった。教師は、その都度、なだめようとするが、意思がとても強く気持ちを变えることはなかった。

集団や個別の指導では、母音の聞き分け、口形の区別等をおこなっている。音のOn / Offの聞き分けには、確実性が見られるようになり、2文字の模倣や1

対1場面での対話姿勢を確立できるようになってきた。身振りにより、自分の気持ちや意思を伝えようとする態度が見られるようになった。絵での表現や物事の意味等の理解については、優れた資質を見てとることができた。

② 4歳児学級での様子

活動への参加には、随分、意欲が見られるようになった。気分次第で活動に入らず、そのまま参加しないこともあったが、2学期以降そのような場面は減っていった。文字への興味が出てきた。

自分の発する声の高低を調節できるようになった。人への関心が高まり、人と関わりたいという気持ちから、とても長い身振りで表現しながら一連のことがらを伝えようとするようになった。「たまごを産んでいるかめ」など表現することがらには、独特のものがあつた。

ことばの表出面では、あまり変化はなく、「バナナ」ということばが「バナ」など正しい音韻の並びとして表出することが難しかった。手話は、比較的容易に覚えることができ、視覚優位の記憶であることが伺えた。

③ 5歳児学級での様子

本人の学習意欲や活動に参加する意欲が高まり、日々いろいろなことを吸収している。単語の聴き取りでカードを取らせると、ほぼ確実に正しいカードを取ることができた。ことばを間違えて言った場合、正しく言えるまで何度も自分から言い続けることができるようになった。文章でも、文字で提示すれば、覚えようとするすることができる。朝の会で、今日の予定を確認したり、自分から予定を読んで確認したりすることもできるようになった。現在は、単語の羅列による表現から文章への移行が課題である。

(2) 母親への支援

① 担任による保護者支援

保護者の悩みは、担任教師との懇談で話されることが多い。保護者との懇談は、年間6回、学期初めと終わりに行われている。保護者との懇談の中で明らかになった各学年時の保護者（主に母親）の悩みや問題と感じている点を要約して示し、それらの悩み等に対して担任が行った支援と子どもの変化を述べる。

<3歳児>

(ア) 母親の悩みや願い

- ・好きなことはやるが、やりたくないことは全くやろうとしない。
- ・自分や友だちの名前がまだ分かっていない。
- ・母親に叱られると、夜泣きすることがある。
- ・家庭では、素直で母親の言うことを聞く。
- ・祖母や父親は、同じことをしても弟（1歳8か月）は叱らずA男だけを叱る。特に父親は、弟をかわいがりA男には厳しい。
- ・父親とは、コミュニケーションが成り立っていない。父親が身振りでA男に話しかけても、A男は聞いていない。
- ・A男も自分なりに父親に話しかけているが、父親には分からないことが多い。
- ・朝の会のあいさつや帰りの会など、他の子どもがしていることもしないことが多い。人に合わせるのが苦手である。
- ・いったん思い込んだら、すぐには気持ちを変えることができない。クラスの他の友だちに迷惑をかけてしまう。
- ・学校でトイレに行かない。
- ・くつを自分ではかなかたり、帰りに抱っこやおんぶをせがんだりすることがあった。
- ・自分でやれることは、自分でやれるようになってほしい。
- ・しゃべってほしい。どうしてしゃべらないのか。

(イ) 母親への支援と子どもの変化

母親が大好きなA男なので、夜泣きをするような叱り方は控えた方がよいことや父親や他の家族とのコミュニケーションの橋渡しを母親がになって欲しい旨を話す。

A男を受容し、家庭で自分だけが叱られるなどのストレスや学校で他の子どもと同じようにやれずに叱られるストレスを緩和していきながら、自分の気持ちをコントロールして活動に参加できることを励ました。

生活の中で使うことばは、意識してことばがけをすることや、遅くともA男のペースに合わせて見守っていくようアドバイスした。

母親がA男を叱ることが2学期頃から少なくなって

いったため、A男の気持ちが安定してきた。まだやれることを甘えてやらないこともあるが、みんなとの活動と一緒に参加できることが多くなってきた。お風呂の中で発音練習などをやれるようになり、少しずつ声を出していくことやおけいこに意識が持てるようになった。友だちに興味を持ち、一緒に遊べるようになってきた。学校では決して行こうとしなかったトイレにも、3学期頃にはようやく行けるようになった。

<4歳児>

(ア) 母親の悩みや願い

- ・「何故できないのか」というようなことにつまずくことがある。
- ・家では、おもちゃがたくさんあるので集中せずに次々に出して遊んでいる。
- ・話そうとする内容が広がり、ジェスチャーだけでは伝わらなくなってきた。少しずつ語彙が増えて欲しい。
- ・「ひらがなと合わせてことばを提示すると良い」とXセンターの訓練担当者から言われている。分からないとA男は、どんどん落ち込んでいってしまう。
- ・人工内耳を装用した後、成果が見られなかったもので、センターでABRの検査をした。異常はなかったものの、次回の診察、訓練までに成果を持っていかなければならないというプレッシャーがある。
- ・無理に何かをやって成果を出そうとして親子で落ち込むことがある。
- ・学級の中で、A男だけが促されないと模倣をしない。
- ・5歳児になることや1年生になることが不安である。

(イ) 母親への支援と子どもの変化

4歳になって離席が減り、機嫌が悪くなることも随分少なくなってきた。自分で絵日記に描きたがったようになった絵の緻密さなどから「見る力が優れている」ことをA男の成長として母親と確認した。また誉めると伸びるタイプであることを、いろいろなできごとから知らせ、無理強いではなく誉めて認めながら学習等を進める方が効果的であることを話す。

2学期から学校で聞いたりした話を家で話すようになったことから、聞く姿勢ができてきたことや活動に見通しができてきたことを確認した。2学期の終わりには、「何とかなっていくものだ」という感想を母親が持ち、ようやく見通しが持てるようになった。

A男は4歳児になってから、成長を見せた。文字に興味を持ったり、ことばを話そうとしたりすることが多くなってきた。自分の名前を指さしではなくことばで言えるようになった。友だちの名前も言うようになった。名前が分からないものには、自分から「これは何」と尋ねることができるようになったなどである。

文にはならないが、「何か言わないと伝わらない」という気持ちから、話そうとする姿勢が見られるようになったことは、大きな成長である。

< 5 歳児 >

(ア) 母親の悩みや願い

- ・手が汚れた時になめることや、爪をかむくせを直したい。
- ・音は聞こえているが、いろいろな音に気づいて欲しい。
- ・安定した声、口声模倣がきちんとできるようになって欲しい。
- ・50音を覚えて欲しい。
- ・身近な単語を覚えて欲しい。
- ・文章で表現できるようになって欲しい。
- ・自分から身近な人や友だちに積極的に働きかけて欲しい。
- ・マイペースなので周囲を意識して行動できるようになって欲しい。

(イ) 母親への支援と子どもの変化

A男の成長が実感できるようになって、母親の強い不安はなくなった。そして「やればできる」という思いを母親が持てるようになってきた。

7月の行事で、『はじめのことば』をA男が言うことになり、前日に家庭で特訓をし、泣きながらもA男が全部の文章を覚えることができたことも大きい。休み前に目標を立てる際にも、「できると思う」、「やってみる」等母親から前向きなことばと共に協力が得られた。Xセンターでの発達検査では、母親が思っていたよりも良い結果が得られ、母親の気持ちをさらに安定させることになった。Xセンターで、キューサインや手話を禁じられていたが、手話の使用がやっと認められた。母親には、手指メディアを用いることは、A男のことばの概念を増やし、音韻の獲得も助けると一貫して助言していた。母親には常に迷いがあったものの、学校側の助言を信じてくれた。

A男は、以前よりことばを覚えるのが早くなってきた。文字にして覚えたことばを、生活の中で使えるようになってきた。また声に出して話をするが多くなってきた。また給食を残さず早く食べることができるようになり、自信もついてきた。お手伝いを率先してやるようになり、友だちや先生を意識して誉められるような行動をとることが多くなってきた。

(3) 副担任による個別指導における保護者支援（4 歳から）

4 歳になった時点から、「音遊び」というテーマに基づき、副担任が個別指導を行ってきた。月に3回くらいのペースで実施した。A男に分かることがら、興味の持てることがらを探し、遊びを中心にしながら言

語に結びつけていく指導を模索した。

< 4 歳児 >

(ア) 指導内容

① 手遊び、リズム遊び

わらべ歌など簡単な歌詞にのせて、手遊びをする。模倣は上手なので、誉めながら遊んだ。その際に歌詞は絵にして、ことばに興味をつなげるようにした。リズム遊びも喜んで遊ぶことができた。リズムに合わせて声を出す場面を大切にした。また、太鼓をたたきながら、リズム打ちをしたりした。

保護者には聴覚を活用しながら楽しんで遊べる「わらべうた」や「手遊び」などを活用して、母子が一緒に楽しんでやりとりをする機会を家庭で増やして欲しい、と話し、遊びの中で共感することから人との関係に気づき、またコミュニケーションへの意欲が高まることを伝えた。

② 数字遊び

言語には興味を示さないが、数字には記号として興味を持っていることが分かった。そこで、「すうじのうた」を紙芝居にしながら、毎回歌うことにした。歌を歌う場面では、CDの音楽に身体をゆすりながら、声を出し自分も歌っているように楽しむ姿が見られた。また、絵を見て、数字と結びつけながら指で数字を形作っていた。

保護者と数字から入ってひらがな等の表記文字へ興味関心をつなげていく可能性を示唆し、A男が視覚的に認知する能力が高い特性を生かし、まず数字から模倣して表記したり手指表現したりしていくと良いことを話し合った。A男が真似て数字や文字を表記できた時は誉めて、母親が喜ぶ様子を見せてあげるようにアドバイスをした。

③ ゲーム

数字に強いということから、実際にボーリングをして、倒れたピンの数を数えながら表に得点として自分が記入するなどのゲームを行った。その際には、ボールを投げる合図としていろいろな楽器の音を聞き分けさせた。これは、黒板にチョークで数字を書く楽しさもあり、とても意欲的だった。お手本を示し、自分で一生懸命模倣できた時には、「上手に書けたね」と言って、必ず誉めるようにした。また、さいころを投げ、出た目を数えながらすごろくゲームも行った。コマには、ぬいぐるみを使い、動物の名前を言わせるようにした。さいころの目の数だけ、ぬいぐるみを正しく動かしながら、数の概念の理解をすすめるようにした。

保護者にはA男が喜んで遊ぶボーリングやすごろくゲームは、家庭でも一緒に遊んでもらう機会を増やしてもらえると、遊びをとおして数の大小等の概念が育っていくことを伝えた。

また、生活の中で数を数えたり、正しく数唱ができるように家族がつきあったりすることが大切であるとアドバイスをした。

④ 音の聞き分け

楽器を2種類選び、隠れて音を出す。どちらの楽器だったかを、タンバリンなら「タ」、笛なら「フ」と1音言わせる。A男は身振りだけで自分の思いを伝えることができ、ことばの必要性や利便性をあまり感じることがない様子なので、ことばで伝える経験をもっと増やしていきたいと考えた。2文字のことばで音韻が2つであっても覚えることが容易には行えないA男が、無理なく楽しくことばを伝える経験をしていくためには、「タンバリン」の音韻からは語頭の「タ」、「フエ」からは語頭の「フ」を言わせることから始めていった。1音ならば簡単に覚えることができ、はりきって「タ」、「フ」と声に出しながらことばとして伝える姿が見られた。教師が行ったことは、役割交代してA男も行うことができた。模倣は上手で、見ていたことがらを無理なく同じようにできるので、役割交代によりゲームがより楽しめた。

保護者には家庭でもことばを使うことの楽しさに気づかせるように、ことばで伝えることができたらい思い切り誉めるなど、家族ぐるみで取り組めると良いことを話した。

⑤ 絵本の読み聞かせ

あまり絵本には興味がなかったが、飽きない程度に少しずつ取り入れ、絵本に興味を持てるようにした。初めは、「絵本を見ようか」と声をかけて「終わり、終わり」と手話で伝えてくる時は、絵本を少し見せて気をひき声かけもするが、それでものってこない時には無理強いしないようにした。しかし、少しずつ絵本の内容の知っている事物には興味を示すようになり、自分から身振りで絵本の絵を見て話す姿も見られるようになった。

保護者には絵本が好きな子どもは、絵本からいろいろな情報を得ることができるし、気持ちも育っていくことを伝えた。親が絵本を読み聞かせることが、子どもを絵本好きにする早道であることも話した。好きなものは好き、興味の無いものには全く興味を示さないというのが子どもではあるが、絵本のある環境を整え子どもの変化を促すことにより、子どもの興味が広がっていくので、気長に絵本で遊ぶ気持ちを持ちつづけるようアドバイスをした。

⑥ カードゲーム

後半になって、ぬいぐるみの動物とカードをマッチングさせたりして、名前を言わせるゲームをするようになると、2文字の名前ならその場で覚ええられるものが1つくらいは出てきた。しかしながら、忘れてしまうのも早く、次回には完全に忘れていた。

保護者には、その場で覚えることができるようにな

れば、次はその能力を伸ばしていくことが大切であることを話した。その方法としては、同じゲームを家庭でも行い「覚える」ことに自信を持たせることを挙げ、個別指導で使用したカードを提供した。

⑦ ひらがな

視覚優位な記憶の方略を持っているようだ。ひらがなも記号として興味を示した。黒板に書いたひらがなを読み、ひらがなのタイルを探して遊ぶゲームをしたり、果物の名前をひらがなで書き同様にタイルを探して黒板にはり自分もひらがなを書いたりするゲームを行った。

音韻を覚えることが不得意であるA男が、ひらがな等の表記文字を早く覚えることは意義があることを話した。ひらがなを見て読み、視覚優位の記憶を利用しながらことばを覚えていくことが可能であり、本人が興味を示しているのは良い機会であることも話し、家庭でひらがなに触れる機会を持っていくようアドバイスをした。

(イ) 子どもの変化

「ことば」の利便性に気づき、ことばを覚えて表出し教師や母親に誉められたいという意欲が顕著に見られるようになった。手話等でことばの概念が形成されるにつれて、集団の中で指導者が伝える内容を知ろうとして「聞く」姿勢が向上していったことが挙げられる。気持ちが安定し、活動の中で参加を拒否してすねるようなことは、4歳児学年の後半にはほとんど見られなくなった。

< 5歳児 >

(ア) 指導内容

① 絵カードと文字カード合わせ

絵カードは動物や果物、食べ物、ディズニーキャラクターやアニメキャラクターで同じ物を2枚ずつ手作りした。そして音韻の少ない物のひらがなカードも用意した。フープでケンパの円を構成し、途中に2箇所絵カードを並べて、カードを取るコーナーを設けた。ケンパの最後にも文字カードを並べ、絵カードと文字カードを合わせるゲームを行った。スタート時には、音声言語で物の名前を伝え聞き取らせる。分からない時は、キューをつけて伝える。それでも分からない時は、手話で伝える。A男が知っている物を5つに知らない物を1つ混ぜることから始め、ゲームごとに新しいことばを覚えるように仕向けていった。

保護者には新しく覚えたことばをなるべく多く家庭でも使って欲しいと伝え、繰り返しが大切なことを話した。

② 神経衰弱（絵カード版）

トランプのゲームである「神経衰弱」は、視覚優位なA男には、得意な分野に入る。このゲームに使うカードには、知っている物の絵カードと知らない物の絵

カードは半々くらいの割合で用いた。絵カードが合った時に、正しく音声言語で名前を言う絵カードがもらえるというルールを作ると、嫌がることなく口声模倣をすることができた。絵カードを見せて、本人が初めて見る物については、手話や絵辞典等で説明し概念を形成できるように心がけた。

保護者には新しく覚えたことばをなるべく多く家庭でも使って欲しいと伝え、繰り返しが大切なことを話した。

③ どっちかなゲーム（ことばの聞き分け）

人工内耳を装用しているため、聴力は40dB SPL程度である。聴覚を活用して、ことばを聞き分ける経験は多く積んでいく必要がある。A男の語彙にはないことばでも2つの絵カードや実物について、名前を先に教えてから口元をかくして発語する。A男は、ことばを聞いてどちらかを特定する。その際に「どっちかな。どっちかな。」と歌いながら、アンパンマンの人形を動かす。指導者の口元はアンパンマンで隠す。単にあてっこをするのではなく、アンパンマンに出題されているような設定にすると、A男は喜んでゲームに参加できた。また、知らないことばでも、ほぼ正確に聞き分けることができた。

保護者には人工内耳装用によって聴覚活用はかなりできている現状を確認し、あとはA男の知っていることばを増やし言語力をつけていくことだと明確な目標が持てるようにアドバイスをした。

④ ことば覚えゲーム

4歳児学年の3学期の時点では、2音韻のことばをその場で覚えることが精一杯であったが、5歳児になって3音韻、4音韻のことばでも練習すれば覚えられるという事実をA男にも母親にも知らせ、自信を持ってもらうことを目指した。果物の絵カードを1枚見せて裏のひらがなも見せて読ませる。ひらがなは、4歳児の終わりには50音全部が読めるようになっていた。書けるひらがなも増えていたので、表記についても練習するため、ホワイトボードにマジックで書かせた後、見せたカードと別の果物のカード2枚と合わせて少し離れた机の上にひらがなの面を見せて置いておく。A男は3枚のカードから覚えた名前を正しく選択するというゲームである。練習を重ねるうちに、3音韻の名前をその場で覚えることもできるようになってきた。

保護者には「ひらがな」を見せつつ新しいことばを教えることは、音韻の並びを覚える手助けとなっていることを説明した。家庭のくらしの中で、ひらがなと一緒にことばを覚える手立てを講じていくことをアドバイスし、具体的にはテレビや机、椅子、ドアなど目につく物にひらがなで名前を書いた紙を貼っておくことをすすめた。

④ 紙芝居の読み聞かせと役割交代

絵本や紙芝居には、興味を持って見ることができるようになった。そこで、昔話や童話などのお話を初めに手話、次にキュード・スピーチによって読み聞かせた後、今度はA男に同じようにお話をしてもらった。紙芝居の絵を見せながら、自分が聞いて分かったことを表現してくれる。A男が「自分がやる」と表現を始めたことがきっかけとなり、役割交代をするようになった。

保護者には役割交代をした場合、自分が理解し分かっていることしか表現できないが、分かったことを伝えたいと思うことがとても大切であり、言語発達を支えるものであることを話した。また、分かっている内容が少しであっても、A男の成長を喜び、家庭でもA男にお話をしてもらって良い聞き役にもなって欲しいとアドバイスをした。

⑤ 時計を読む

アンパンマンの時計絵本を使って、時計を読んだり、時刻を時計で示したりすることができるよう指導した。4歳児の時から、数字に興味を持っていたため、時計にはすぐに関心を持った。アンパンマンの絵本では、朝7時におきて、8時に朝食をとって、9時に幼稚園に行くとふだんの生活が展開される。時計が絵本の画面についているので、7時、8時、9時と指導者が絵本を読み聞かせながら、時刻を時計で示していくことができる。それを見ているうちに長針が12、短針が7で7時と理解することができた。1週間以上において個別指導をする際に、同じ絵本を見せると、時刻の読み方を覚えていた。

保護者にはA男の記憶力の良さについて話した。学習能力は高いので、音韻の並びが入りにくいという弱点を今のうちに少しでも克服していけるよう努力していこうとアドバイスをした。

⑥ 4つ並べるゲーム（右から何番目）

立てたプレートには、穴があいており、コインを穴に入れながら縦、横、ななめに自分のコインが並べば勝ちになる市販のゲームである。これを用いて、順番にコインを上部の投入口から入れていく。その際、自分のコインは相手に委ね「右から（または左から）○番目に入れて」と指示して入れてもらう。A男は、ゲームのやり方はすぐ分かったが、ことばで指示することは、自分の力だけでは言えない。何回も指導者に教えられながら、懸命に指示していた。逆に指示されることばは、キューサインを見ながら理解し、正確にコインを入れることができた。

保護者には聞いて理解する力が随分伸びていることを知らせ、決り文句で指示する言語表現を文章で覚えようとする機会を持つていくことも大切であると話した。

⑧ お話作り

キャッチボールをしながら、A男の動作を文章にしてホワイトボードに書き読ませた。「ぼーるをなげる。」「ぼーるをうける。」「ぼーるをころがす。」などの文章表現の中から、次に自分がしたいことを選ませて言わせた。

アンパンマンの人形を使って、アンパンマンにいろいろな動作をさせて、何をしたかA男に聞いた。「アンパンマンが来た。」「アンパンマンがあくしゅをした。」「アンパンマンが泣いた。」などの文章表現を求めたが、手話で表現することも難しかった。

保護者支援には手話でも良いから2語文で話をするように、普段の生活でかかわって欲しいと話をした。自分の欲求は、手話表現で2語文の表現も可能になってきている。見たことを話すためにはいろいろな動詞の語彙が必要になる。動詞を意識して語彙が増えるように働きかける必要性があることを話した。

(イ) 子どもの変化

4歳児の頃に比較すると就学に向けて「何とかしなければならぬ」という保護者の気持ちが強くなっていることはうかがえる。子どもの変化では、母親と家庭で覚えたことば「くすぐったい」などを、頻繁にことばとして使おうとする姿が見られるようになった。

音韻の入りにくさは変わらないが、少しずつ改善されつつある。

Ⅲ. 事例2 (B男) について

(1) 幼児の様子

現在5歳10ヶ月。聴力は裸耳で右93dBHL、左97dBHL。両耳は補聴器装用により、補聴器装用閾値は40dB SPL前後である。

教育相談を開始したのは、幼稚部入学直前であった。難聴が発見されたのは、3歳児検診であり、聴覚へのフォローは同学年の子どもたちと比較してもかなり遅い。

① 3歳児学級での様子

指導者と視線を合わせることがほとんどない。席にはほとんど着かず、ずっとふざけている状態が続いた。キューサインは、手指の巧緻性の問題か模倣がきちんとできなかった。1学期は、自分が注意されていること等が伝わらなかった。指さしをし、「ああ、やい、やい」等の音声と身振りで何かを伝えたりする様子が見られた。遊びは好きで、指導者とかかわりや特にスキンシップを好んだ。口形模倣は1～2音が限界で、最後まで指導者を注視することは難しかった。人とかかわり方が十分ではなく、一方的な場合が多い。人に対して甘える気持ちは大きく、また日本語(言語)のない状態で生活する術を身につけてしまっていたため、何かを伝えようとする姿は見られても、

最後まで伝えきろうとすることはなかった。音の数が不十分なので、楽しいかわりをしながら増やしていく努力をする必要があったが、3学期には手話や身振りによって理解言語は少しずつ増えてき始めた。しかし手話表現が正しく認知されていなかったり、自分なりのサインであったりすることも多い。

② 4歳児学級での様子

キューサインで言えることばが、多少、見られるようになってきた。文字(ひらがな)もいくつかは、覚えた。ひらがなで表記された「いちご」のカードといちごの絵カードをマッチングさせることができるようになった。

3歳時より離席は減ったものの、まだ十分に指導者を注視することはできない。ひらがなで名前を書こうとするが、まだあいまいである。お話は好きで、絵を見るとその場面から自由にイメージをひろげるといって姿が見られ始め、自分が虫になったり動物になったりして身体表現をするようになってきた。音韻を覚えようとする気持ちは薄く、苦手意識もあるのか、なかなか音声言語で話すことができない。

③ 5歳児学級での様子

以前よりは、繰り返し課題に取り組めるようになってきた。言えることばは、20語から30語くらいである。ことばは増えつつあるが、まだまだことばが入りにくい。口形は、ようやくとれるようになってきたが、まだ正確さに欠ける。ひらがなは、50音中半分くらいを読めるようになってきた。読もうという意欲は見られる。友だちの名前を、ひらがなで表記する際に、ばらばらに書いたりしている。文字としての取り込みではなく、絵としての取り込みに近いのではないかと考えられる。

その場で記憶することが少しずつ可能になってきたが、完全に覚えていつでも言えることばも少しはあるが増えていない。また文章での表現になりにくい。音韻の数の認識が不十分であるため、「パパ」が「パパパパ」となる。視線が最後まで合わせられないという状況がいまだに変わらないため、口形があいまいになることや、家庭での生活場面でことばを必要としない生活をおくるといった環境が変わらないために言語が発達していかないのではないかと考えられる。また、補聴器は家庭では装用していない。

(2) 母親への支援

① 担任による保護者支援

事例1と同様に、保護者との懇談の中で明らかになった各学年時の保護者(主に母親)の悩みや問題と感じている点を以下に簡単に述べる。またそれらの悩み等に対して、担任が行った支援と子どもの変化について述べる。

< 3 歳児 >

(ア) 母親の悩みや願い

- ・きちんと聴力検査ができない。
- ・睡眠のリズムが狂いがちで、夜中に起きてしまうことがある。
- ・食べることにについて、好き嫌が多い。特に野菜が食べられない。
- ・ジュースのことを「じゅー」、おかしのことを「まんま」とことばで話しているが、他は身振りで表現している。
- ・コミュニケーション手段は、耳で聞き口で話してやりとりをして欲しい。
- ・家から1人で飛び出していくが、信号はまだ分かっていない。
- ・はさみやカッターを見つけると、人に刺そうとする。
- ・絵本は好きだが、読み聞かせは好まない。
- ・少しでも物の名前を覚えて欲しい。
- ・離席が多く、じっくり活動に参加できない。

(イ) 母親への支援と子どもの変化

- ・補聴器を両耳装用にすれば、ことばが出てくるのかという母親の問いに対しては、音が入るのは大変良いことであるが、音がすぐにことばの表出につながるかどうかは分からないので、声がけや模倣など意識的なかかわりやB男が落ち着いて相手と向き合えるようにしていきたいと話す。また、家では補聴器をはずしてしまうのではなく、補聴器をつけて音を聞くようにさせて欲しい旨を伝える。
- ・B男は、5月頃はトイレで排尿はできたが排便は難しかった。9月には、大便もでき自分で拭くことができるようになった。キューサインを模倣する姿も見られるようになった。家ではサインが伝わるのは、姉しかない。環境に慣れ、のびのびと学校で過ごせるようになった。要求も何とか伝えてくる。叱られている意味についても、理解できるようになってきた。人と目を合わせることは、難しい。

< 4 歳児 >

(ア) 母親の悩みや願い

- ・服を脱ぐことはできるが、着ることは上手にはできない。
- ・好き嫌が多い。
- ・数は10くらいまで覚えた。友だちの名前を覚えていて欲しい。2文字ぐらいのことばから覚えて欲しい。
- ・虫や動物が好きで模倣をするが、なかなか名前を覚えられない。
- ・C男の真似をして祖父母をよくたたく。C男に対して、B男はいやな思いを持っている。家でC男は友だちではないとC男の写真をごみ箱に捨ててしまっ

たりするので、どうしたら良いのかと思う。

- ・センターの先生から、生活年齢のわりにことばが出ていないと指摘されショックを受けた。キューサインと音声のみで話す方が良いと言われたが、疑問を感じている。

(イ) 母親への支援と子どもの変化

母親がXセンターの先生に言われて疑問を持っていること（キューサインと音声のみで話す）については、母親が考えているように手話も併用しながらキューサインと音声で音韻を確認する方法で良いのではないかと伝える。またC男をB男が嫌っていることについては、学級内でのかかわりの様子を話し、友だちとして仲良くしていくことができると話していく。母親のC男への感情は、C男の母親との関係が大きいので、母親同士が分かり合っていけるようにB男の母親の感情を受け止めつつアドバイスをした。

離席は随分減り、落ち着いて活動に取り組める様子が見られるようになったが、個別指導で1対1になるとそれが難しくなってしまうことがある。手話は、意味も理解しつつ使えるようになってきた。音声言語として獲得できていることばは多くない。

< 5 歳児 >

(ア) 母親の悩みと願い

- ・自分の名前が、3音にもかわらず2音になる。また、「パパ」が「ママ」「パパパ」となる。姉の名前は、正しく言えるようになった。
- ・母音とよく使う文字（ひらがな）は覚えたが、もともとひらがなに興味がなく分からないものが多い。
- ・犬を「ワンワン」、猫を「ニャー」と覚えている。正しいことばに直したい。
- ・友だちの名前を覚えて欲しい。
- ・ゲームの勝敗にこだわって、負けた後、すねて立ち直れないことがあった。
- ・自分の意見や思いを、相手に自分で伝えて欲しい。
- ・できないとすぐにあきらめてしまう。
- ・C男とD男のことが苦手なようである。
- ・家では、B男が大好きな姉と過ごすことが多く、姉に長期休業の宿題等もまかせているが、ひらがなは読むことができて書くことができない。

(イ) 子どもの変化

何かを話すときには、必ず「うちはお姉ちゃんが・・・」と話されるので、その都度「お母さん、お願いします」と担任が話してきた。夏季休業前の懇談で、1年生の教科書を見せながら1年生で学習する内容について具体的にを見せていくと母親の表情が変わってきた。C男とD男が苦手と話す、実際には母親同士の関係に何らかのつまづきがある。また、ひらがなは全音読めるが書けない等、母親が話すB男の実態と担任が見ている実態にはずれが生じている。担任は、

読むのもあいまいだと見ている。

活動にはみんなと同じように楽しく参加できるが、まだ指導者と目が合わない。内言語は増えているが、表出言語が4歳の時点からほとんど変わらない。個別指導については、ふざけずに活動できるようになった。自分の興味が無いものに関しては、集中力が続かない。

(3) 副担任による個別指導における保護者支援（4歳から）

4歳になった時点から、「音遊び」というテーマに基づき、副担任が個別指導を行った。月に3回くらいのペースで実施した。B男に分かることがら、興味の持てることから探し、遊びを中心にしながら言語に結びつけていく指導を模索した。担任による個別指導においても、副担任の個別指導でもふざけることが多く、指導が指導として成立する場面はあまり多くなかった。

< 4歳児 >

(ア) 指導内容

① 手遊び，リズム遊び

わらべ歌など簡単な歌詞にのせて、手遊びをする。指導者にまだ慣れない時点では、身体接触を嫌がった。少し慣れてきても、目が合わず気持ちが集中しないため、すぐにやめようとする。

保護者には、聴覚を活用しながら楽しんで遊べる「わらべうた」や「手遊び」などを活用して、母子が一緒に楽しんでやりとりをする機会を家庭で増やして欲しいと話し、遊びの中で共感することから人との関係に気づき、またコミュニケーションへの意欲が高まることを伝えた。

② 数字遊び

言語には興味を示さないが、数字には記号として興味を持っていることが分かった。そこで、「すうじのうた」を紙芝居にしながら、毎回歌うことにした。これは、CDの音楽を楽しむ姿は一度も見られなかった。勝手に離席してしまい、自分の好きな遊びに指導者を誘う。

保護者には、数字から入ってひらがな等の表記文字へ興味関心をつなげていく可能性を示唆し、B男が視覚的に認知する能力が高い特性を生かし、まず数字から模倣して表記したり手指表現したりしていくと良いことを話した。B男が真似て数字や文字を表記できた時は、誉めて母親が喜ぶ様子を見せてあげるようにアドバイスをした。

③ ゲーム

実際にボーリングをして、倒れたピンの数を数えながら表に得点として自分が記入するなどのゲームを行った。その際には、ボールを投げる合図としていろい

ろな楽器の音を聞き分けさせた。これは、黒板にチョークで数字を書く楽しさもあり、少し意欲を見せた。お手本を示し、自分で一生懸命模倣できた時には、「上手に書けたね」と言って、必ず誉めるようにした。また、さいころを投げ、出た目を数えながらすごろくゲームも行った。コマには、ぬいぐるみを使い、動物の名前を言わせるようにした。さいころの目の数だけ、ぬいぐるみを正しく動かしながら、数の概念の理解をすすめるようにした。

保護者には、B男が喜んで遊ぶボーリングやすごろくゲームは、家庭でも一緒に遊んでもらう機会を増やしてもらえると、遊びをとおして数の大小等の概念が育っていくことを伝えた。また、生活の中で数を数えたり、正しく数唱ができるように家族がつきあったりすることが大切であるとアドバイスをした。

④ 音の聞き分け

楽器を2種類選び、隠れて音を出す。どちらの楽器だったかを、タンバリンなら「タ」、笛なら「フ」と1音言わせる。ふざけてしまい、きちんと楽器の音を聞き分けることができなかった。

保護者には、家庭でもことばを使うことの楽しさに気づかせるように、ことばで伝えることができたらしい切り誉めるなど、家族ぐるみで取り組めると良いことを話した。

⑤ 絵本の読み聞かせ

絵本には大変興味があり、しばらくは集中できた。絵を見て、自分が動物になったり虫になったりして動き回ってしまう。関係ができるまでは、飽きてしまつて絵本を終わろうとした時には、それ以上無理強いしないようにした。だんだん最後まで絵本の読み聞かせを聞くことができるようになった。

保護者には、絵本が好きな子どもは、絵本からいろいろな情報を得ることができるし、気持ちも育っていくことを伝えた。親が絵本を読み聞かせることが、子どもを絵本好きにする早道であることも話した。家庭で絵本の読み聞かせをすることをアドバイスをした。

⑥ ひらがな

視覚優位な記憶のためか、ひらがなには記号として興味を示した。黒板に書いたひらがなを読み、ひらがなのタイルを探して遊ぶゲームをしたり、果物の名前をひらがなで書き同様にタイルを探して黒板にはり自分もひらがなを書いたりするゲームを行った。

保護者支援としては、B男は概念形成はある程度できているので、あとは言語に興味をもち、「ことばが便利」と気付くことが大切であると話をした。おけいこの発展としてできること、家庭での復習にはこのようにするなどのアドバイスも行った。ひらがなに興味を示し始めた時には、文字を覚えることのメリットを話した。

(イ) 子どもの変化

「ことば」の利便性に気づき、ことばを覚えて表出し教師や母親に誉められたいという意欲がそれほど育たなかったため、目を合わせて前向きに話をする姿勢も身につけにくかった。手話等でことばの概念が形成されるにつれて、集団の中で指導者が伝える内容を知ろうとして「聞く」姿勢は少しずつ向上していったが、個別指導になると甘えが出るのかふざけた自分のペースに教師をまきこもうとした。

< 5 歳児 >

(ア) 指導内容

① 絵カードと文字カード合わせ

絵カードは動物や果物、食べ物、ディズニーキャラクターやアニメキャラクターで同じ物を2枚ずつ手作りした。そして音韻の少ない物のひらがなカードも用意した。フープでケンパの円を構成し、途中で2箇所絵カードを並べて、カードを取るコーナーを設けた。ケンパの最後にも文字カードを並べ、絵カードと文字カードを合わせるゲームを行った。スタート時には、音声言語で物の名前を伝える。B男が知っている物を5つに知らない物を1つ混ぜることから始め、ゲームごとに新しいことばを覚えるように仕向けていった。

保護者には、新しく覚えたことばをなるべく多く家庭でも使って欲しいと伝え、繰り返しが大切なことを話した。

② 神経衰弱 (絵カード版)

トランプのゲームである「神経衰弱」は、視覚優位なB男には、得意な分野に入る。このゲームに使うカードには、知っている物の絵カードと知らない物の絵カードは半々くらいの割合で用いた。絵カードが合った時に、正しく音声言語で名前を言うと絵カードがもらえるというルールを作ると、嫌がることなく口声模倣をすることができた。絵カードを見せて、本人が初めて見る物については、手話や絵辞典等で説明し概念を形成できるように心がけた。

保護者には、新しく覚えたことばをなるべく多く家庭でも使って欲しいと伝え、繰り返しが大切なことを話した。

③ どっちかなゲーム (ことばの聞き分け)

補聴器を装着しているため、補聴器装用閾値は40 dB SPL程度である。聴覚を活用して、ことばを聞き分ける経験は多く積んでいく必要がある。B男の語彙にはないことばでも2つの絵カードや実物について、名前を先に教えてから口元をかくして発語する。B男は、ことばを聞いてどちらかを特定する。その際に「どっちかな。どっちかな。」と歌いながら、アンパンマンの人形を動かす。指導者の口元はアンパンマンで隠す。単なるあてっこではなく、アンパンマンに出題

されているような設定にすると、B男は喜んでゲームに参加できた。知らないことばは、聞き分けることができない。

保護者には、補聴器によって聴覚活用はかなりできている現状を確認し、「B男の知っていることばを増やし、言語力をつけていく」という明確な目標が持てるようにアドバイスをした。

④ ことば覚えゲーム

4歳児の3学期の時点では、2音韻のことばをその場で覚えることが精一杯であったが、5歳児になって3音韻、4音韻のことばでも練習すれば覚えられるという事実をB男にも母親にも知らせ、自信を持ってもらうことを目指した。果物の絵カードを1枚見せて裏のひらがなも見せて読ませる。ひらがなは、5歳児の初めには50音中3分の1くらいを読めるようになっていた。書けるひらがなを増やすため、表記についても練習するように、ホワイトボードにマジックで書かせた後、見せたカードと別の果物のカード2枚と合わせて少し離れた机の上にひらがなの面を見せて置いておく。B男は3枚のカードから覚えた名前を正しく選択するというゲームである。練習を重ねるうちに、3音韻の名前をその場で覚えることもできるようになってきた。

保護者には、「ひらがな」を見せつつ、新しいことばを教えることは、音韻の並びを覚える手助けとなっていることを説明した。家庭のくらしの中で、ひらがなと一緒にことばを覚える手立てを講じていくことをアドバイスした。具体的には、テレビや机、椅子、ドアなど目につく物にひらがなで名前を書いた紙を貼っておくことをすすめた。

⑤ 紙芝居の読み聞かせと役割交代

絵本や紙芝居には、興味を持って見るができるようになった。そこで、昔話や童話などのお話を初めに手話、次にキュードスピーチで読み聞かせた後、B男に同じようにお話をしてもらった。紙芝居の絵を見せながら、自分が聞いて分かったことを表現する。B男は、すぐに飽きてしまい、途中までしかできない。ホワイトボードに絵をかきながら、自分の伝えたい話を表現することは、自分からすすんで行えた。

保護者には、役割交代をした場合、自分が理解し分かっていることしか表現できないが、分かったことを伝えたいと思うことが言語発達を支えるものだと話した。また、分かっている内容が少しであっても、B男の成長を喜び、家庭でもB男にお話をしてもらって良い聞き役にもなって欲しいとアドバイスをした。

⑥ 時計を読む

アンパンマンの時計絵本を使って、時計を読んだり、時刻を時計で示したりすることができるように指導した。4歳児の時から、数字に興味を持っていたため、時計にはすぐに関心を持った。アンパンマンの

絵本では、朝7時におきて、8時に朝食をとって、9時に幼稚園に行くとふだんの生活が展開される。時計が絵本の画面についているので、7時、8時、9時と指導者が絵本を読み聞かせながら、時刻を時計で示していくことができる。それを見ているうちに長針が12、短針が7で7時と理解することができた。1週間後に個別指導をする際に同じ絵本を見せると時刻の読み方を覚えていた。

保護者には、B男の記憶力の良さを話をした。学習能力は高いので、音韻の並びが入りにくいという弱点を今のうちに少しでも克服していけるよう努力していこうとアドバイスをした。

⑦ 4つ並べるゲーム（右から何番目）

立てたプレートには、穴があいており、コインを穴に入れながら縦、横、ななめに自分のコインが並べば勝ちになる市販のゲームである。これを用いて、順番にコインを上部の投入口から入れていく。その際、自分のコインは相手に委ね「右から（または左から）○番目に入れて」と指示して入れてもらう。B男は、ゲームのやり方はすぐ分かったが、ことばで指示することは、自分の力だけでは言えない。何回も指導者に教えられながら指示していた。逆に指示されることばは、キューサインを見ながら理解し、正確にコインを入れることができた。

保護者には、聞いて理解する力が随分伸びていることを知らせ、決り文句で指示する言語表現を文章で覚えようとする機会を持つていくことも大切であると話した。

⑧ お話作り

キャッチボールをしながら、B男の動作を文章にしてホワイトボードに書き、読ませた。「ぼーるをなげる。」「ぼーるをうける。」「ぼーるをころがす。」などの文章表現の中から、次に自分がしたいことを選ばせて言わせた。

また、アンパンマンの人形を使って、アンパンマンにいろいろな動作をさせて、何をしたらB男に聞いた。「アンパンマンが来た。」「アンパンマンがあくしゅをした。」「アンパンマンが泣いた。」などの文章表現を求めたが、手話で表現することは難しかった。

保護者には、手話でも良いから2語文で話をするように、普段の生活でかかわって欲しいと話をした。自分の欲求は、手話表現で2語文の表現も可能になってきていると思うが、見たことを話すためにはいろいろな動詞の語彙が必要になる。動詞についても、意識して語彙が増えるように働きかける必要性があることを話した。

（イ）子どもの変化

4歳児の頃に比較すると就学に向けて保護者の中に「何とかしなければならぬ」という気持ちが強くなっていることは伺える。

しかし、思いとは裏腹に、家庭でのかかわりは10歳年の離れた姉に任せきっている。保護者はB男を愛してはいるが、きちんと向き合っただけでかかわっていきこうという姿勢が見られない。

B男は4歳児の頃に比較すれば、ふざけることは激減し、おけいこをする姿勢がようやく整い始めた。

音韻の入りにくさは変わらない。家庭で頑張りさせる経験がないために、本人にも「できる」という実感が欠けている。

IV. 考察

A男、B男ともに3歳児検診によって難聴が発見され、Y校の教育相談を受けることになった。A男の聴力は厳しいと医療機関では言われていたが、聴力検査の結果は本人があまり反応できておらず信頼性に欠けていたのではないかという意見もある。医療機関に押し切られるような形で人工内耳を装用したA男は、補聴器を活用することも十分ではなく音への関心やことばへの関心も希薄なままでの手術だったが、装用後40dBHLくらいの聴力になった。一方、B男は、補聴器を装用すれば40dBHLくらいの聴力である。

A男とB男はともに、Y校幼稚部へ入部し、3歳児学年での様子は集団の活動に入っていけないという共通の課題があった。言語発達にも遅れが見られ、幼稚部で付き添う母親には「なぜ、みんなと同じようにできないのか」という悩みや焦りが見られた。保護者の願いや悩みについては、担任の教師が子どもの実態に即した目標を定め、保育の中で取り組み、家庭でのかかわりについては具体的にどのようにかかわっていけば良いのかを母親に話をしている。3歳児の時点で、A男もB男も活動の見通しを持つことが難しく、また集団活動についても、教育相談での経験が少なかったために馴染めなかったことや2人の母親がともに教育相談を受けた期間が短く、保護者支援を十分に受けられなかったというのが根本的な問題であったのではないかと推測される。また、ことばに関心がなく、自分の思いは身振りや表情で伝えることに終始し、音韻が記憶されにくい実態は、4歳児の学年になっても共通に見られる課題であった。

担任の教師が中心になって行った保護者支援は、子どもの実態を正しく知り受容し、子どもの課題を共通認識し、学校と家庭で協力しながら取り組むを主な柱立てとして行われている。具体的な方法としては、保護者の子どもへのことばがけ、子どもにことばの持つ便利さを気づかせること、またことばを使った時の子どもへの賞賛などを共通確認している。その成果として、A男の母親は「この子は、誉めればできる。やればできる子なんだ」と子どもの実態を理解して叱ることをやめ、誉めて育てる方針に切り換えていった。こ

のことからA男の活動への参加は前向きになりことばを覚えることにも意欲を持つようになっていった。

A男、B男の言語発達が遅れた理由としては、以下に示すようにいくつか考えることができる。すなわち、①難聴発見時期の遅れにより、最早期教育を十分受けることができなかった、②母親への保護者支援が十分行われることなく幼稚部へ入学してきた、③集団活動に参加する経験が不足していたため、幼稚部3歳児学年において十分活動に参加できなかった、④幼稚部入学後の母子関係に問題があった、⑤音韻が情報として入りにくく定着しにくい能力的な問題があった、⑥医療関係（Xセンター）の言語指導方針と学校の方針に違いがあった、等である。

特に②、④、⑥の問題は、直接、保護者支援にかかわることがらである。②の問題については、幼稚部の母親教室やXセンター等の医療機関、同じ幼稚部の母親同士の会話などから少しずつ知識として得ることができるものもあった。しかし、④の問題については、幼稚部に入り聴覚障害教育を受け始めたからこそ新たに持ち上がってきたことがらとすることができる。集団活動に積極的に参加できないA男とB男の3歳児学級での様子を目にして、母親には焦り悩み始める。A男の母親はA男を叱り、B男の母親は叱ることは無かったが、家庭内でB男と向き合うことを避けている。両母親ともに、子どもへの愛情は十分持っていたが、子どもの言語発達や成長に大きな不安があるため、その母子関係には母親の思いが空回りするような状況が見られたと考えられる。そして、⑥の問題は、A男もB男も人工内耳や補聴器の活用によって音が入っているという理由から、『キューサインと音声のみで言語指導を行うように』とXセンターから指示されていた。しかし、学校では、音韻のみの情報では意味を理解させることができないA男とB男には、手話により言語理解を図っていた。母親はXセンターの指導に振り回された後、指導方針に対して疑問を感じ、その後、手話の使用をためらわなくなった。方針の違いに迷いがあった期間は、A男とB男の母親にも存在する。⑤の問題は、一見、A男とB男の問題であるように感じるが、視覚優位という点が音韻情報を遠ざけてしまうような状況は、往々にして聾学校の早期教育段階の子どもたちに見られる。その極端な例に対して教師は手立てを示していく必要があるのではないかと考える。また、子どもと本当に向き合うことができない母親には、言語発達を促す子育てが自分には難しいというコンプレックスがあったり、見通しが持てず苦しんでいたりする状況がある。音韻が情報として入りにくく定着しにくい子どもへの適切な指導方法を確認することは、保護者支援の領域でもあると考える。

また、A男が言語発達において成長し始めた理由としては、担任による保護者支援により「母親がA男の

現状を受容しよう、理解しよう」と母親が考えるようになった時点から、少しずつA男の気持ちが安定し始めたことがあげられる。気持ちが安定すれば、集団の活動にも参加でき、A男が変わっていった。母親の意識が変わることにより、A男は苦手な「ことばを覚える」ことに、前向きになっていった。それは、学校だけではなく家庭でも同様である。焦りを乗り越え、等身大のA男を受け止めることにより、母親とA男の母子関係に変化が生じていった。A男が言語発達においても成長した理由は、母子関係の変化であろうと考えられる。

B男が言語発達にあまり変化が見られない理由としては、担任による保護者支援としてアドバイスされたことに、母親が納得し、意識や行動が変化することがほとんどなかったことが考えられる。B男に分かるような語りかけや家庭で補聴器を装用するなど日常的に行われていないなど、B男が嫌がればそれ以上は踏み込んで向き合おうとしない状況が続いていることが挙げられる。聾学校でのB男は、自分勝手な行動は減り、我慢できるようになってきた。しかし、言語指導で教師と向き合う時に、指導者と目を合わせる事が難しい。それは、B男の自信のなさによるものかもしれないが、目が合わないことや口形模倣が十分できないことは、音韻の入りにくさに拍車をかけている。母親がB男を溺愛しているのは、聾学校での母子関係を見るとよく分かる。しかし、肝心なところで、母親がB男を理解し向き合うことができていないようだ。この母子関係が変わらず、家庭における環境も変わらないことが、B男の言語発達を阻む要因となっているものと推測される。

A男の事例の分析により母親の育児姿勢の変化やA男のありのままを受容する態度によって母子関係が改善され、A男の言語発達が促されたものと思われる。より良い母子関係が基礎になり、より豊かな言語発達が可能になるためには、子どもを正しく理解しながら向き合う関係を構築するように支援する方向性が有効であると言えよう。

母子関係に行き詰まりがあり言語発達が滞っているB男の場合、母親のストレスもかなり蓄積されていると考えられる。B男の母親の悩みには、C男やD男のことが出てきている。C男の母親には、その子育てに不満を持っており、他の母親と一緒に無視をするなど母親同士の関係にも歪みを生じるようになった。B男が自信を持てないために、指導者と視線が合わせられないことや、いざという時に引いてしまいモジモジする様子に焦りを感じている母親は、B男が引いてしまう理由を同級生との関係にあると見ているのも、母親のストレスが関係している。言語発達がすすんでいるD男にB男が気後れしていると副担任に相談してきたことがあり、いわゆる、できる子どもに対

して複雑な感情を抱いていることがうかがい知れる。家庭ではB男を姉（高校1年生）に任せていると言い切ってはばからない母親の意識を変えるため，担任は何度も懇談で話し合っているが，大きく意識を変えることはできなかった。C男の母親への集団での疎外については，C男の母親が第2子出産，第3子出産を契機にしてC男の付き添いをやめてしまったことを発端に大きく表面化した。C男の母親が母親集団に馴染めなかったことから，全面的に教師がかばうという状況にあり，そのことにどうしても承服できないのがB男の母親であった。いろいろな不満を抱えながら，毎日休みなくB男とともに長距離を通学して来ている母親の言い分にも一理あるが，母親同士の関係を緊迫させてしまう原因には，B男の成長に対する悩みや心配が大きくかかわっていると考えられる。

参考文献

- 1) 愛知県立一宮聾学校幼稚部教育研究班（1999）幼稚園における保護者支援－保護者へのアンケート調査を通して考える－第33回全日本聾教育研究大会研究集録，66－67.
- 2) 野本祐子・都築繁幸（2002）聴覚障害児教育への手話導入に関する一考察 愛知教育大学障害児治療教育センター治療教育学研究，22，75－83.
- 3) 佐藤正幸ら（2002）乳幼児期における聴覚的支援と保護者支援－新生児聴検で聴覚障害とされた1事例について－ 第36回全日本聾教育研究大会研究集録，196－197.
- 4) 末森明夫（2002）聴覚障害児を育てている聴覚障害者の一体験 ろう教育科学，43，17-19.
- 5) 田中美郷（2003）聴覚障害児教育の新しい方向を目指して 日本聴覚障害教育実践学会 第4回大会発表論文集，1－16.